会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会
〒692-0064
島根県安来市古川町534
TEL 0854-28-9988
FAX 0854-28-9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com

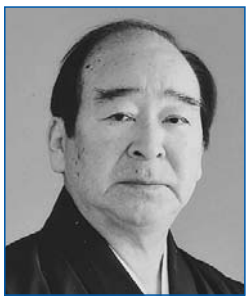
11月10日に開催された安来節保存会代議員会において、平成28年度の上位昇格者と表彰者が報告されました。

今回、鼓の部では矢倉哲郎さんが8年ぶり、踊の部では、一宇川　勤さんが30年ぶりに名人となられ、准名人に2名、大師範に10名の方が昇格されました。おめでとうございます。

来年の1月10日の唄い初め会において、免状・表彰状の授与と昇格披露を行います。

上位昇格者

―名人（二名）―



一宇川　勤
踊の部（本部道場）

矢倉哲郎
鼓の部（尾高）

―准名人（二名）―

野々村府美枝
唄の部（本部道場）

安達裕治
唄の部（智頭）

―大師範（十名）―

絃　藤井幸雄（本部道場）　踊　経種保雄（松　江）
絃　永田美由紀（本部道場）　唄　吉持　誠（境港東）
唄　野坂英明（石　見）　唄　曽我真子（江田島能美）
唄　柳楽くにえ（神　門）
銭太鼓　唄　高次春雄（広　島）
周藤伏子（湖　陵）　踊　砂川弘子（大利根）

（総会資料名簿順）

会員表彰者

（三十一名）

弓浜マキ子（本部道場）
岩佐勝雄（本部道場）
和田芳子（出　雲）
坂根俊昭（石　見）
山崎典子（大　田）
松原静子（湖　陵）
陶山一三夫（湖　陵）
藤井健蔵（大　社）
倉増千世代（津和野）
小村恭一（宍　道）
高橋敏子（仁　多）
林　和子（浜田中央）
吾郷孝市（平　田）
渡部泰孝（松　江）
福冨セツ子（松　江）
永見熊寿（益　田）
田中照美（東　伯）
田中信尋（鳥　取）
藤原卯一（米　子）
古村京子（米　子）
森岡美智子（江田島能美）
新先美知子（江田島能美）
福原由美（広　島）
道下幸枝（広島玉実）
正原昌子（広島東）
中尾美津子（広島西）
米田公子（広島西）
梅田年志（広島西）
安田美都子（岡　山）
寺尾源造（関　西）
新井智香子（大利根）

新役員決定

任期　平成27年10月1日～平成29年9月30日

このたびの役員改選に伴い、新役員が決定しました。安来節がますます普及・発展するよう新役員の方々のご尽力に期待し、会員の皆様のご協力をお願いします。

会長
近藤宏樹（市長）

副会長
新田典利（副市長）
田中武夫（市議会議長）

専務理事
成相二郎

常務理事
石井信行（市産業振興部部長）

理事
岩田拓郎
澤田秀夫（市議会議員）
四代目 渡部お糸（家元）（審査長）（指導部長）
渡部弘充
富田幸男（本部ブロック）
中井　亨（米子ブロック）
出雲勝之助（出雲ブロック）
山崎眞由美（益田ブロック）
金谷　正（浜田ブロック）
安達裕治（鳥取ブロック）
高次春雄（広島ブロック）
福田辰雄（石見ブロック）
野坂亮若（岡山ブロック）

監事
長島　勲（本部道場）
三代目 砂川　清（米子）

資格審査員
中本實夫
仲前長治
三代目 安達順吉
四代目 渡部お糸
上代安夫
原　文男
佐々木偉市
出雲正之助
矢倉哲郎
五代目 富田徳之助
一宇川　勤
渡部孝夫
須田茂善
榧野暉夫
石岡邦宏
石川弘一

指導部員
松村益男
原　淳文
濱崎正人
小泉宣明
伊藤芳男
四代目 安達順吉
二代目 松尾英興
野々村府美枝
富田英好
出雲啓之助
丸瀬千登世
小村顯二

(有)仁木三味線
製造・販売/修理　三味線・鼈甲撥・尺八・太鼓
〒240-0022 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西久保町197-1
TEL 045(713)4319　FAX 045(741)4796
HP http://www.syamisen.com/

大小鼓製造卸販売
杉本鼓店
住　所：島根県松江市馬潟町360-13
電　話：0852-37-2033
ＦＡＸ：0852-37-1264
※通信販売も致しますので、お気軽にお電話ください。
修理、下取りもご相談ください。

料亭・山常楼と安来の町の賑わい

並河健蔵

安来市街の中心地、国道九号がゆるやかにカーブする所にある料亭・山常楼（やまつねろう）の主屋と土蔵が、平成二十六年十二月十九日わが国の登録有形文化財に指定された。この建物は昭和九年に建てられたものであるが、江戸時代の末期、慶応の頃に創業した由緒ある料亭である。そこで明治・大正・昭和・平成と続く安来の町の賑わいを、大正四年（一九一五）刊行の「安来港誌」などで概観してみよう。

安来の港は松江・松平藩の時代から領内東の要衝であり交易港として栄えてきた。港に近い通りには和鉄・米・木綿・油・蝋・塩などの問屋や料理屋・旅館・網元・呉服屋・酒屋などが軒を連ねた。港が賑わうに連れて商人や船員たちの交流が盛んとなり、料亭や旅館が数多くみられた。「安来港誌」の広告欄には山常楼を初め十数軒の名が載っている。

国の登録有形文化財に指定された料亭・山常楼

日露戦争が終わった明治三十八年（一九〇五）には文部省の役人を荒文旅館に泊めてお糸の安来節を披露したところ、大好評を得て郷土芸能として保存するように激励された。また朝日館の広告には山陰本線安来駅前として「停車場に最も近く海岸桟橋亦程近し。楼上近く十神山を望むべく眺矚尤佳也（ちょうしょくもっとも）」と宣伝している。その当時は明治四十五年（一九一二）に山陰本線（京都～出雲今市）が開通して、交通の拠点が港から安来駅へ移行し始めた時期で、双方の客を狙った苦心の作である。

大正四年、安来銀行が海岸近くにあった本店を町の目抜通りに移し、ルネッサンス風の赤煉瓦の洋館を新築した折には、同年一月二十四日付の山陰新聞は落成式の模様を詳しく記した後、山常楼に百余名が出席して「…酒間を極めて散会せり」と報じている。山常楼は赤煉瓦の洋館とは道を挟んで西隣にあり規模の大きい料亭であった。また当時は安来の町に三つの検番があり、検番を通して三十余名の芸妓が料亭に出向いて安来節を聞かせ、客の旅情を慰めたという。

大正九年（一九二〇）第一次世界大戦が終息して「反動不況」が全国を襲ったが、昭和六年（一九三一）に満州事変が勃発して戦時体制となり景気は回復した。そこで山常楼は顧客の増加に対応して昭和九年、隣の赤煉瓦の洋館に対比して純和風の堂々たる現在の建物を新築したのである。

まず玄関は唐破風の屋根、天井には古色蒼然たる神代杉の一枚板がはめられている。車寄せの壁には氷面を思わせる粋なガラスの丸い装飾窓がある。鬼瓦には跳ねあがる鯉、神霊視される竜、亀や獅子などが見られ、縁起のよい威風堂々たる建物である。

玄関を上がって真正面には間取り三間の襖絵に圧倒される。天野台鞍の写生風南画・桐の絵である。いかにも客を迎えるにふさわしい鷹揚とした雰囲気が漂う。右側の控えの間の襖には小笹雪外の「山水四季」が細やかに描かれている。いずれも安来の文化を築いた画家である。次に応接間や八畳の客間が続き奥座敷に至る。二階には七十七畳の大広間があり、高い天井と幅広い襖、床の間には由緒ある掛軸や重厚な飾り壷などがあり、目に入る総てがスケールが大きく広間を豪華なものにしている。なかでも日本画の重鎮・山岡米華の筆力気韻に富んだ大作が大広間を席巻するように掛けられている。恐らく明治四十三年（一九一〇）夏に横山大観と共に松江の松崎水亭に滞在した折に所望されたものではなかろうか。

ここまで紹介すると自ずから安来節の三味線と鼓の妙なる音が聞こえてくるようだ。大広間の舞台ではお糸の美声が酒宴に興ずる人々を心酔させ、階下の客間では座敷芸にふさわしく安来節の奥義を静かに味わう粋人の姿が目に浮かぶ。やがて賑やかに安来拳も始ったのであろう。

こうして明治・大正・昭和・平成へと続く長い時の流れの中で、安来の町の住人や多勢の客人たちに親しまれてきた料亭・山常楼の威風堂々たる姿は、安来の町の賑わいと自由闊達な風土を象徴しているのである。

私と安来節

安来節保存会と私

指導部員
四代目 安達順吉
（本部道場）

早いもので、安来節を始めて五十年が過ぎました。安来高校二年生の秋、山岳部で中国大会に出場した折、夜のキャンプファイヤーで「安来と言えばどじょうすくいに安来節を発表して下さい」と地元の人々からの要望があり、板垣君がどじょうすくいを踊り、私が安来節を唄った事が大盛況でした。

当時、安来地方では芸人は三割下がりと位置付けられていましたが、今後、全国大会や国体に島根を代表して出場すれば必ず安来節を発表する事になると思い、安来節芸文学院（高野静子先生）に十月から唄を習い始めました。その事が親戚の二代目安達順吉師匠に分かり、三味線をやってみないかと誘われました。父は反対でしたが祖母が姉の嫁ぎ先の事もあり、家にあった三味線に皮を張ってくれました。昭和三十九年の正月、師匠に習い始めました。はじめは、楽器をかまう事が楽しく三日を開けずに習いに通いました。そのうち、あまり毎日来るので、師匠から「家で練習をしてから来なさい」と言われ、週一回、師匠の都合の良い日に通うようになりました。

あれから何十年という言葉はありますが、人も変わり、組織も拡大化をしました。私も色々な役員をしながら、現在は指導部員であり、安達一門の四代目を襲名しました。私のお願いは、会費を支払い、目標を持って保存会に入会された皆様が、厳しい練習を乗り越え、結果だけを優先し、自らの意見を主張するのではなく、あくまでも趣味の会の延長として人の心をくすぐるような技量の向上と人格の形成を目指したいと願っております。

傘寿を前に安来節との出合いを振りかえる

山﨑正登
（宮島支部長）

私と安来節との出合いは、昭和四十八年に民謡は何一つとして歌えない私に「難しい唄だけど、長く唄い続ければ何とかなる」と故 酒井フミエ先生に誘われ、広島支部に入会した事です。それから、途中仕事の関係で休みましたが、平成三年から宮島支部に再入会し、現在まで三十一年余りの長きにわたり、唄・踊・銭太鼓を習っています。その中で各種目の難しさや奥深さを痛感する一方で、安来節を通じて多くの方々と巡り会い、絆が出来た事が、私の大きな財産となっています。

平成十三年からは支部の事務局、平成二十二年からは支部長として、支部の運営に微力ながら尽力しております。

平成二十五年には、初めて広島ブロックの当番幹事をさせて頂きました。会員の少ない当支部は、鯉城支部の応援を得て、予選会や師範研修会等の各行事を開催する事が出来ました。その際、夜遅くまでパソコンによる各資料作成や山陽四国地区優勝大会プログラム等の作成に苦労しましたが、全ての大会資料を次の当番幹事に引き継ぐ事ができ、何とか責務を全う出来たと思っております。

二十一世紀は「高齢者の世紀」と言われており、安来節保存会の会員も高齢化が進み、年々参加者が少なくなっています。これを打破する事は大変難しい課題ではありますが、意欲を持って保存会の行事に参加する事が、体力と気力の保持にもつながり、長く安来節を唄い続ける秘訣だと思っています。

昨年は、師範審査の唄で十回を越える挑戦の結果、師範に昇格しました。また、今年一月の唄い初め会では、多年にわたる活動に対して表彰を受けました。これもひとえに堀口邦江先生をはじめ諸先生方の温かいご指導と会員の皆様のご協力の賜と深く感謝しております。

私は、来年、傘寿を迎えますが、今後も更に研鑽を重ね、体力の続く限り安来節を唄い続けると共に、新規会員の加入促進と安来節の更なる発展の為に積極的に努力したいと思っています。

野村建男
（山口支部）

二年前に勤めていた仕事も定年退職し、現在、農業をやりながら、今や切っても切れない生活の一部になっている安来節、その安来節のお陰で色々な人との出会い経験をさせていただき、大変ありがたく思っています。

始めたきっかけは、今から約三十六年前になります。安来節会員募集の看板を見て、隠し芸の一つぐらいと思い入会し、始めは唄から習い始めました。その内に三味線の音に魅力を感じ、三味線も習い、踊り、鼓、銭太鼓と審査を受けるものが無くなる度に受審していたら、樽井支部長をはじめ諸先生方のお陰で二年前になんとか師範まで一応昇格しました。安来節をやっていると唄を唄う時はお腹に力を入れ、息を大きく吸って大きな声を出したり、銭太鼓や踊りなどは日頃運動不足の私にはちょうど良いと思っています。今年は初めて唄の師範の部で全国優勝大会に出場する事ができ、良い体験をさせていただきました。また沢山の本場の安来節を聞く事ができ、感動しました。

奥が深い安来節、これからもまだまだ学ぶ事が沢山あります。いつも安来節で出掛ける時、何も言わずに送り出してくれる妻に感謝しつつ、今後も技量を磨いて、魅力ある安来節を皆さんと共に楽しみながら、続けていきたいと思います。

小池孝子
（本部道場）

私が、安来節を知ったのは小学生の頃でした。父が凄く安来節が好きで、毎日のように蓄音機をかけ、安来節や浪曲、民謡等を聴いていました。ネジが止まりそうになると急いでネジを回したものです。そんな父は毎年、優勝大会を見に行っていたようで、昭和三十三年頃に録音したテープを私が時々出して聴いていますが、昔の人の唄、絃、鼓はすばらしいです。今の安来節と昔の安来節はちょっと違っているように思います。

私が安来節をするきっかけは、三味線が欲しいと思っていた所、たまたま知り合いの方が「三味線買って」と言われ、すぐに買い求め、床の間に飾って楽しんでいました。そこへ安来節の先生が来られて「教えてあげる」と言われましたが、その時はまだやる気がしませんでした。

それでも何度も言われたので、安来節がどんなものなのか拝見させていただくと三味線の音色がとても良かったです。それから習い始め、何もわからない私に熱心に三味線を教えていただき、ご指導のお陰で師範に昇格する事が出来ました。私が師範になって一年が過ぎた頃、お友達から「三味線を教えて」と言われ、大変でしたが、私も一生懸命勉強し、指導しました。今は、たくさんのお弟子さんがおり、その内少年が六人いますが、みんな安来節が大好きで、唄、絃、鼓、銭太鼓と頑張っております。教える事は自分自身が勉強しなくてはなりません。私も出来ない時には、先輩やお友達の先生方に応援していただきながら、頑張っています。お弟子さんも師範に昇格し、私共の教室を盛り上げてもらっています。

安来節をしていて良かった事は、家元四代目渡部お糸先生と国内、海外と色々な所へ連れて行っていただきました。海外はブラジル、ロシア、タイ等で公演され、世界中の人に安来節を広めておられるお糸先生はすばらしいです。私も安来節をしていたから、出会いがあり、たくさんのお友達が出来た事を大変嬉しく思っております。

これからももっともっと勉強して恥ずかしくないように頑張って行きたいと思っています。今後とも御指導、御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

坂口　誠
（江田島能美支部）

今から20数年前のことです。今の場所に引っ越してきたある日の午後、どこからともなく「テテン、テテンテンテン…」三味線のなんとも心地よい音色が聞こえてきました。でもこれがなんという民謡なのか、どなたが弾いておられるのか知りませんでした。

夏になると安来節全国大会のポスターが何枚も張り出され、これは何のイベントなんだろうと興味深く見ていますと「どじょう掬い踊り」が目に入りました。お恥ずかしい話ですが、このときはじめて「どじょう掬い」が安来節のひと種目であることを知りました。このポスターが貼ってあったところが石川弘一先生のご自宅であり、心地よい三味線の音色は先生が練習されていたものだと知ったのはかなり後のことです。

平成15年正月に知人の勧めで江田島教室の練習を見学したのを機に入会させていただきました。当時、三味線に少し興味があり、民謡が弾けるようになれば良いなと軽い気持ちでした。ところが、石川先生から「2月中旬に資格審査会があるのでさっそく練習しましょう。1ヵ月あるので大丈夫！」と三味線を手渡され、翌日から猛特訓が始まりました。先生や先輩の指導のおかげで資格審査に合格することができました。この時は、短期間であり苦しいこともありましたが「何事も一生懸命やれば成すことができる。」ということを安来節から学びました。

この翌年から唄も勉強し、3年前からは鼓と銭太鼓の練習に励んでおります。特に銭太鼓は移動講習会に来られた濱﨑先生の模範演技を拝見し、衝撃を受けました。あの銭太鼓の捌きの美しさと躍動感がとても印象的でした。銭太鼓は演技の難しさの中に何ともいえない充実感をおぼえます。この充実感を多くの人に味わっていただきたいと思っています。

今、支部人員の減少が課題になっておりますが、地域のイベントに積極的に参加して安来節を披露することやポスター等の掲示、インターネットの活用など新しいPR方法を考えていく必要があると考えます。

現在でも民謡に興味がある人はたくさんおられます。その人たちに安来節を愛してもらえるように、地域の諸行事に積極的に参加するとともに「日々精進、日々稽古」石川先生の言を肝に銘じ、技量向上に努めたいと思います。

支部情報

健康医療番組で「どじょうすくい踊り」紹介

三浦清市
（東京支部）

最近テレビや新聞で健康関連の放送や記事を多く目にするようになりました。そんな中で、私が四年程前から川崎市の市民交流館で始めた「安来節・健康どじょうすくい踊り講座」が、テレビ東京の取材を受け、去る四月二十日夜「健康増進に役立つ日本古来のお座敷芸」として詳細に紹介されましたが、以下概要につきご報告致します。

放送は「主治医が見つかる診療所」という定時番組で、有名タレントが多数参加し、さらに各分野の現役専門医が助言者として参加する健康医療番組です。特に注目すべきは、この踊りの重要な部分である「低い姿勢での歩き」「すくう様子」等々の各所作を詳細に分析し、この踊りが下半身の筋力強化のみではなく、身体内部の筋力強化にも有効で、高齢者の転倒予防や認知症予防にも効果を発揮するとの専門医からの解説がありました。テレビ放送以後、見学者や入会希望者が多く、一教室増設する事になりました。今まで安来節は日本の伝統芸能として大事に保存すべきと私達も取り組んで来ましたが、今回のテレビ放送を通じ、この踊りには色々な健康増進効果も兼ね備えている事を再認識致しました。

我が国の高齢化の進み方は、他国に例を見ない勢いで進んでおり、厚生労働省の調査でも今や高齢者の七人に一人が認知症になっており、今後益々深刻になる見込みです。これからの保存会活動に当たっては、今までの伝統的踊りの説明に加え「転倒、認知症予防効果」についても、医学的根拠を精査し、その効果を訴えながら会員増に結びつけられないものかと考えております。

諸先輩のご助言等頂ければ有難く思います。

健康どじょうすくい踊りの会

市民発　地域をつくる人・活動

笑い声で感じる幸せ

健康寿命を伸ばすには最適な運動、と注目を集めているのが「どじょうすくい踊り」。4月にはテレビ取材も受け、放映後には問い合わせの多さにうれしい悲鳴を上げているのが「健康どじょうすくい踊りの会」だ。

会は2011年7月、麻生市民交流館やまゆりで、区民公開講座を開いた三浦市さんを中心に受講者が集まって発足した。メンバーは男性6人、女性4人。テープの伴奏に乗り、歩く基本から始まり、所作を手順に従って練習をする。

腰を落とし、軽快なリズムに合わせ、ひょこひょこと低い姿勢で踊るので、太ももやふくらはぎなどの筋力強化にもつながる。それぞれのしぐさ、表情のおかしさに、練習中でもメンバーの笑い声が絶えない。非日常の体験は右脳を使い、認知症の予防にも効果的という。

「笑いは健康にとって良いことは知られているけれど、楽しみながら足腰を鍛えられる運動がほかにあるでしょうか。しかも見ている人たちにも笑いを届けられるのですから。」リーダーの森一郎さん（75）は話す。

最近では入会希望者の見学や、高齢者施設などからの出張依頼も相次ぎ、笑い声のなかで踊る幸せを感じている。

（市民記者・植木　昌昭）

かわさき市民活動センター☎044(430)5566
http://www.kawasaki-shiminkatsudo.or.jp

〈参考記事〉

三代目
砂川　清
（米子支部長）

支部創立六十七周年発表会、米子支部は一九四八年に創設、日頃の鍛錬の成果を披露し、会員相互の連帯を深めようと七六年から発表会を続けて現在に至っている。発表会スタート当時は支部会員百五十名を超える大世帯で班対抗の団体戦もあり、優勝旗を目指し、猛練習をしたものです。途中社会事情により休止の年もありましたが、三十七回目として今年の四月十九日、米子市皆生の米子市観光センターで開催しました。会員六十名の内、四十人強が参加、オープニングは神楽の演目である恵比寿舞で幕開け、続いて三級から准名人まで階級別に唄、絃、鼓、踊りの組み合わせで順次安来節を熱唱、熱演、合間に正調関の五本松節等の民謡踊りで盛り上げた。フィナーレは、これまた神楽装束も凛々しい若手会員の大黒舞で締めくくり、今後支部会員の健勝と支部の発展を祈願した桟俵詰めの紅白餅を会員と詰め掛けた聴衆に配り、発表会を祝った。各自これからの精進と保存会行事での活動を誓い家路についた。

※ 新日本海新聞社撮影

なお、終わりに支部の重点目標として会員の日頃の練習成果を発表できる機会を作り発表会の継続と高齢者施設の慰問活動に加え、会員一人一人のメソッド（資質・人格）の向上をスローガンに掲げ、頑張りたい。

東京支部創立20周年記念
国際親善交流ベトナムハノイ・サパ
（平成27年12月11日～16日）

お問い合せ
安来節保存会東京支部
TEL：03－3361－0488
FAX：03－3361－4193

会員の声コーナー

私の見付けたもの

春名重信
（関西支部）

私は岡山県美作に育ち、安来節の踊りをよく見る機会がありました。私の兄も人の集まりなどに披露してくれたものでした。安来市の所在が県境に近く、馴染み親しんだと思います。老境にある今は暮らしに趣のあるひとつに「どじょうすくい」を自分のものにしたいと…。折り良く同郷の安来節保存会関西支部の富田朋徳師匠に縁をいただきました。正月に私の見付けたものがこれだと思ったからです。日常を横歩きするだけでなくタテに思考の糸を下げながら暮らす趣をと…。しかし、ヨコにある物、人、自然の中に己が在る事を心掛けながら行き着く所を掘り下げるのが苦行の極意だと…。どじょうすくいの芸もそのひとつ、軽妙な踊りを助けるのは見る人、絃、唄で囃子を奏する人らに支援をいただき、成り立つものと気付くのでした。

教われば安来節の起源は徳川時代とあり、現代に至る、そして花開いたと知りました。全国の地方、土地に各々の民話、民謡が芽生えて発展し、今日に至るも時代の流れに合ったものと思われます。重ね重ねてこれらの伝統芸能を守り続ける人々がおられる事は格別の思いがあるからではないか。私も遅蒔きながらその一人に加えて頂きたい、そのように願っております。

ここに安来節保存会の発展と関わる人々の御健勝をお祈りしつつ、私の思いを記します。

「可愛い後輩ができました！」

平田　茂
（津山支部）

一昨年の三月、私が勤務する会社の六十周年記念事業という事で、貸切の「飛鳥クルーズ」が企画されました。大阪港天保山より出航で淡路島、神戸港を巡る一泊二日の旅です。注目は、社員六百人が見守る中での「アトラクション大会」、トリを任された私は「どじょうすくい踊り」をサプライズでしました。（私はまだ師範ではありませんが、今回は師匠の特別のお許しを頂いて踊らせて頂きました。）

日頃はネクタイとスーツ姿でデスクに座り、部下に向かってあれこれ指図している堅物上司の〇秘出し物という事で、始まる前から興味津々の眼差しが特設舞台に注がれているようです。やがて「テテン、テテン、テンテン」の三味線伴奏とともにザルを被った野良着姿の私が踊り出ますと、会場がどよめきました。指笛と掛声が錯綜し、ヤンヤ、ヤンヤの喝采です。（これは踊りが素晴らしかったわけではなく、日常の私とのあまりの落差がうけにうけた模様です。）踊り終えても「アンコール！」の声が収まりません。正直、息が上がってフラフラだったのですが、調子に乗ってもう一回踊ってしまいました。未熟な私の男踊りながら、六百人の観衆をあっと言わせる大きな魅力があった。予想を超える反響の大きさに「安来節・どじょうすくい踊り」のパワーにしばらく呆然としたものです。私の意外な一面は、社内でたちまち噂になりましたが、何より嬉しかったのは、飛鳥に同乗していた若い女性社員の一人が「ぜひ、一緒に習いたいです」と言ってくれた事です。彼女は我が社初の、鉄骨建設材料の女性営業マン。愛くるしい顔で、錆や油汚れも厭わず、大型トラックの運転もこなします。さっそく、師匠のお取り計らいのもとに、今年の新入社員の歓迎会でお披露目しました。

熱心で寛大なお師匠様に深謝し、可愛い後輩とともに、また踏ん張って精進していきたいと思います。

記念誌を発行
〝唄われて100年の魅力〟

出雲街道民謡交流会
主宰
渡部孝夫
（本部道場）

安来節保存会創立100周年記念・安来市無形民俗文化財指定を記念して本年八月に記念誌を発行しました。この冊子は出雲街道民謡交流会の活動経験をもとに編集したものです。

【内容について】

本書は稽古の現場でたびたび取り上げられる身近な課題をクイズ形式で解説しています。

熱心に稽古をしていてちょっとしたヒントが本書にあります。このヒントは上達のために大きな役割を果たします。基礎とはいえ芸について文章で表現していますので無理な点があるかもしれませんが、日ごろテーマを持って稽古に励んでいるあなたに効果があります。

【記念誌発行の経緯】

さて、本書の自費出版に至った経緯は次のようなことに危機感を抱いたからです。

・安来節のファンがはなはだしく減少していると思われることです。昭和五十年代の安来節全国優勝大会は一般の入場者が多く盛んな応援があって、会場は熱気に包まれていました。昭和四十、五十年代、安来節に関する出版物が多かったことでも一般の愛好者が多かったことを裏付けています。

・なぜ現在は状況が変わったでしょうか。この原因を調べるため出雲街道民謡交流会は多様な事業を手掛けてきました。たとえば市民フォーラム、自主公演、発表会などなど。この事業を通じて見えてきた問題点は観客に見てもらう芸としては「安来節に元気がない。」ことでした。

・よく聞く意見は少子高齢化社会などが原因で人気の低下、会員数の減少があると言われます。しかし、会員数がいまの半数以下の頃も安来節の表現はもっと元気がありましたので、このことは理由にならないでしょう。

では安来節のファンが増え、自分もやってみようという気持ちになる安来節にする、この方法はあるでしょうか。

【本誌のねらい】

・唄は、《訴える》の語源からきているといった人がいます。「歌詞を表現する」。「聞く人に伝える」。「楽しい気持ちにする」。この要素は歌に限らず絃などすべてに該当します。これは安来節を表現するため大切な要素です。

・出雲街道民謡交流会の四年にわたる活動から得た教訓は〝基礎を徹底的に追及する〟ことでした。

内容は未熟なところもあってご批判などご意見がおありと思いますが、改訂版の参考にしたいと思いますのでご教示いただければ幸甚に思います。

なお、多くの皆様に読んでいただきたく価格は低廉に頒布させていただいています。ぜひ一冊お手元においていただきますようお願いいたします。

【付　録】

安来節歌詞集（あんこ入りと粋な素唄九十五句）

安来節は、あんこ入りの句があったから普及できたといっても過言ではないと思います。舞台演芸にあんこ入り安来節は欠かせないものでした。

【申し込み・問い合わせ先】

・渡部　孝夫　090-2809-1233
・安来節保存会　0854-28-9988
・安来節保存会東京支部
　支部長　棚橋　保　080-5495-3685
・安来節保存会本部道場
　総務部長　安達　雅宏　090-2297-8729

安来節保存会 どじょうすくい踊り 東京教室一宇川会 発表会を企画して

一宇川てい子
（本部道場）

東京教室一宇川会では、どじょうすくい踊り発表会を企画したいと考え、昨年の暮れより日程を6月7日と決め、湯島教室・朝日カルチャー立川教室・八王子教室の会員が中心となり、進めてきました。会場はライブハウス「ばくだん畑立川」とし、手書きの横断幕、手製のチラシを作り、友人・知人に配布、朝日新聞のアサココ欄に掲載等、会員ひとりひとりが知恵を凝らしてきました。中でも、困ったことは、会員は踊手がほとんどで、地方による生演奏ができないことでした。テープによる音楽のみではと、師匠の一宇川勤先生に相談をし、普段、教室で唄っている私と湯島教室の一宇川皓司さんが担当することになりました。

ライブハウスは幕が黒一色で踊り手の紺絣が引き立つよう黄緑の布を舞台後ろに張り、そのうえに横断幕をし、その前で踊る工夫をしました。

当日は、日曜日の午前中にもかかわらず、開演前から会場いっぱいのお客さんが詰めかけ、立ち見が出る程でした。踊、初心者5人、3級5人、二段1人、三段1人、准師範3人、師範3人、大師範1人、銭太鼓1級1人計20人出演しました。他にも2人踊り、踊体験コーナーもあり、お客さんが4人、舞台に上がっての熱演でした。およそ2時間、「待ってました、イケちゃん」「がんばれ！」等声援が上がる中、緊張の中にも、一生懸命踊っていました。同じ踊りだけをお客さんに見てもらうことに少し不安がありましたが、「面白かった」「見ごたえがあった」と、帰っていくお客さんの声を聞き、ほっとしました。